

# 『空間と時間と起て』

定光寺 乙川文英  
平成二十七年一月二十七日  
20  
加茂法苑会

## 伝光録 第一章

加茂法苑会

○摩訶迦葉一梵名 Maha-Kasyapa 十大弟子の一人、頭陀行第一といわれる。  
○因に世尊拈華瞬目し、摩訶迦葉に付嘱す！出典は『天聖広灯録』巻二か。  
○正法眼蔵涅槃妙心一仏法の神髓であり、涅槃の究極の境地。釈尊が体得した真理を指す。

○婆羅門一インドの四姓制度の最上位とされる。バラモン教の祭式を執行する神官を中心としているが、「耕田バラモン」の実例にもあるように、実際には祭式に携わらない場合も少なくない。補注参照。  
○烏瑟白毫一烏瑟は烏瑟賦沙 (Ushisa) の略。頭の頂上に骨光が隆起し、髻(もとどり)のようになっていること。白毫とは両眉の間に右旋した白毛。  
○多子塔一ヴェーシヤールーの西北三里のところにある塔。  
○十二頭陀一頭陀は梵語

dūta の音写語。修行者が衣食住において厳格な禁欲生活を送る十二の規範。  
○声聞一教えを聞いて悟る仏弟子。大乘仏教では縁覚(独覚)と共に「小乗仏教」とみなす。  
○靈山一靈鷲山、王舎城の東北にそびえる山。  
○経師論師一経論の言句にこだわって注解を専らとする法師。  
○伝灯録一宋、永安道原編『景德伝灯録』三〇巻、一〇〇四年成立。  
○普灯録一宋、雷庵正受編『嘉泰普灯録』三〇巻、一一〇〇四年成立。  
○仏心印一歴代の祖師を通じて、印可印証されてきた仏心を指す。

【本則】  
第一祖、摩訶迦葉尊者、因世尊拈華瞬目、迦葉破顔微笑。世尊曰、吾有正法眼蔵涅槃妙心、付嘱摩訶迦葉。  
〔第一祖、摩訶迦葉尊者、因に世尊拈華瞬目し、迦葉破顔微笑す。世尊曰わく、「吾れに正法眼蔵涅槃妙心有り、摩訶迦葉に付嘱す。』〕

【機縁】  
摩訶迦葉尊者、姓は婆羅門。梵には迦葉波、此に飲光勝尊と曰ふ。尊者生る時、金光、室に満て、光ごとく尊者の口に入る、因て飲光と称す。其身金色にして、三十一相を具足せり。唯烏瑟白毫の欠たるのみなり。多子塔前にして、初て世尊に値ひたてまつる。世尊、善来比丘とのたもふに、鬚髪すみやかに落ち袈裟体に掛る。乃ち正法眼蔵を以て付嘱し、十二頭陀を行じて、十二時中虚しく過ごさず。但形の醜

悴し衣の匏陋なるを見て、一会悉く怪む。之に依て、処処の説法の会毎に、釈尊座を分ち迦葉を居らしむ。然しより衆会の上座たり。唯、釈迦牟尼一会の上座たるのみに非ず。過去諸仏の一会にも不退の上座たり。知るべし、是れ古仏なりといふことを。唯諸の声聞の弟子の中に排列すること勿れ。然るに靈山会上八万衆前にして、世尊拈華瞬目す。皆心を知らず、默然たり。時に摩訶迦葉独り破顔微笑す。世尊曰く、吾に正法眼蔵涅槃妙心、円明無相の法門あり、悉く大迦葉に付嘱すと。

【拈提】  
謂ゆる彼時の拈華は祖祖単伝し来りて、妄りに外人をして知らしむることなし。故に経師論師、多くの禅師の知るべき所に非ず。実に知りぬ、其実処を知らざること。然も恁麼なりと雖も、恁麼の公案、靈山会上の公案に非ず。多子塔前にして付嘱せし時の言なり。伝灯録、普灯録等に載る所は、是れ靈山会上の説といふこと非なり。最初に仏法を付嘱せしとき、是の如きの式あり。故に仏心印を伝ふる祖師に非ざれば、彼の拈華の時節を知らず、又彼の拈華を明らめず。諸禅徳、子細に参到し、子細に見得して、迦葉の迦葉たることを知り、釈迦の釈迦たることを明らめ、深く円妙の道を単伝すべし。拈華は暫く置く、彼の瞬目せし所、人人明らめ来るべし。汝等よのつね揚眉瞬目すると、又是れ罽曇の拈華瞬目せしと、一毫髪も隔らず。汝等、語話微笑す

○許多—あまた、そこばく。  
○眼華—眼病のとき、目に見える華。空華。  
○無量劫來—永遠の過去世から。  
○師資—師と弟子のこと。  
○意根—六根の一、意識を生ぜしめるもの。  
○坐断—断ち切ること。  
○鶏足山—ブツダガヤ一の東南にある山。摩訶迦葉入寂の地。  
○慈氏の下生—弥勒菩薩(慈氏)が未来世に成仏して、衆生救済のため、この世に下つてくること。  
○直指単伝—伝法を端的に指し示し、その意を師から弟子へと受け継いでいくこと。  
○築著磕著—突いたり叩いたりすること。自由闊達な所作。  
○扶桑国—日本。  
○七仏—毘婆尸仏・尸棄仏・毘舍浮仏・拘留孫仏・拘那含牟尼仏・迦葉仏・釈迦牟尼仏の過去七仏。

○兜卒天—兜卒は梵語 *Usta* の音写語、六欲天の一。弥勒が一生補処の菩薩(次の生に仏となる菩薩)として住するところ。  
○常在靈鷲山、—天人常充滿—出典は『法華経』—如来寿命量也。  
○大乘—加賀大乘寺、登山禅師の『伝光録』開示の寺。

ると、摩訶迦葉、破顔微笑せしと、全く毫髪も異なることなし。然れども、彼の揚眉瞬目せし者を明らめざれば、西天に釈迦あり迦葉あり、自心に皮肉骨髓あり、許多の眼華、多少の浮塵、無量劫來、未だ曾て解脱せず、未來劫も亦沈淪すべし。若し一度彼の主人公を識得せば、摩訶迦葉まさに、汝諸人の鞋裏に在て動指することを得ん。知らずや、瞿曇揚眉瞬目せし所に、瞿曇乃ち滅却し了ることを。迦葉破顔せし所に、迦葉乃ち得悟し来ることを。是れ則ち吾有に非ずや。正法眼蔵却て自己に付嘱し畢りぬ。故に喚で迦葉と為すべからず、喚で釈迦と為すべからず。曾て、一法の他に与ふるなく、一法の人に受るなし。之を喚で正法と為す。彼れを頭はさんが為に、華を拈じて不変なることを知らしめ、破顔して長齡なることを知らしむ。恁麼に師資相見、命脈流通す。円明の了知、心念渉らず、正しく意根を坐断し鶏足山に入り、遥に慈氏の下生を待つ。故に摩訶迦葉、今に入滅せず。諸人、若し親く学道して子細に參徹せば、迦葉不滅のみに非ず、釈迦も亦た常住なり。故に汝等諸人、未曾生より直指単伝して、古に亘り今に亘りて築著磕著す。故に諸人二千年前の昔を思慕すること勿れ。唯急に今日に弁道せば、迦葉鶏足に入らず、正に扶桑国に在て出世することを得ん。故に釈迦の肉親今猶ほ暖かに、迦葉微笑また更に新たならん。恁麼の田地に到り得ば、汝等却て迦葉に嗣ぎ、迦葉却て汝等に受けん。七仏より汝等に到るのみに非ず、汝等まさに七仏の祖師たることを得ん。無始無終古來今を絶して、即ち是

れ正法眼蔵付嘱有在ならん。之に依て釈迦も迦葉の付嘱を得て、兜卒天に今に有在なり。汝等も靈山会上にして有在不變易なり。道ふことを見ずや、常在靈鷲山、及余諸住処、大火所燒時、我此土安穩、天人常充滿と。唯、靈山会上のみ所住処といふに非ず、豈、梵漢本朝も亦た洩るることあらんや。如来の正法流轉して一毫髪も欠ることなし。若し然れば此会は、是れ靈山会たるべし。靈山は是れ此会たるべし。唯諸人の精進と不精進とに依て、諸仏、頭出頭没せるのみなり。今日も頻りに弁道し、子細に通徹せば、釈尊直に出世なり。唯、汝等自己不明に依て釈尊昔日入滅す。汝等已に仏子たり。何ぞ仏を殺すべけんや。故に急に弁道して速かに慈父と相見すべし。よのつね釈迦老漢、汝等と俱に行住坐臥し、汝等と俱に言語伺候して、一時も相離ることなし。一生若し彼の老漢を見ずんば、諸人悉く皆不孝の人たらん、已に仏子といふ。若し不孝の者たらば、千仏の手も及ばず。今日大乘の子孫、また恁麼の道理を指説せんとするに卑語あり。諸人、聞かんと要すや。

【頌古】

可レ知雲谷幽深处。更有三靈松歷三歲寒。

十四首

へ知るべし、雲谷幽深の処、更に靈松の歳寒を歴る有り。へ